The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『徒然草』における盛親僧都像と中国の隠逸者
Author(s)	謝, 立群
Citation	詞林. 2001, 29, p. 46-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67468
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『徒然草』における盛親僧都像と中国の隠逸者

謝　立群

はじめに

『徒然草』第六十段には、仁和寺真乗院の盛親僧都の自由でわがままな行動が描かれている。従来の研究で指摘されているように、盛親僧都は、『徒然草』のうち、もっとも綿密かつ精緻に描写された人物であり、また、兼好の見出した理想的な人間像の一つである。[1]

本稿で着目したいのは、そのような盛親僧都の人物描写に、中国の隠逸者像の影響が色濃くうかがえるという点である。阮籍、陶淵明など中国の隠逸者の持つイメージが第六十段の人物造形にどのような影響を与えたのかについて考察し、兼好の求めた隠者像を明らかにしたい。

一　陶淵明伝との関わり

第六十段は三つの節に分けられる。第一節は、盛親僧都の好物である芋頭に焦点を当て、その愛好ぶりが描かれている。第二節は、盛親僧都がある法師に「しろうるり」という異名をつけた話であり、第三節は、盛親僧都の性格についての全体的な描写である。まずは第一節を掲げてみる。

真乗院に、盛親僧都とてやごとなき智者有けり。芋頭といふものを好みて多く食ひけり。談義の坐にても、大なる鉢にうづたかく盛りて、膝元に置きつゝ、食ひながらぞ文をも読みける。煩ふことあるには、七日、二七日など、療治とて籠ゐて、思ふ様によき芋頭を選びて、ことに多く食ひて、よろづ病をも癒しけり。人に食はすることなし。たゞひとりのみぞ食ひける。きはめて貧しかりけるに、師匠死にさまに、銭二百貫と坊一譲りたりけるを、坊を百貫に売りて、かれこれ三万疋を芋頭のあしと定めて、京なる人に預けて置きて、十貫づゝ取寄せて、芋頭をともしからず召しけるほどに、又異用に用ゐることなくして、そのあし皆に成にけり。三百の物を貧しき身にまうけて、かく計らひける、まことにありがたき道心者なりとぞ、人申ける。

盛親僧都はきわめて貧しかったが、師匠の死に際に、銭二百貫と僧房一つを譲られ、僧房を百貫で売り払ったその全額を芋頭の代金と決め、京都にいる人に預け、十貫ずつ取り寄せては芋頭を食しているうちに、他の費用に使うことなく使い果たしてしまったという内容である。この話は、『徒然草抄（磐斎抄）』に、「僧都のみにあらず。淵明に顔延之が銭二十万をくりたれば。即送二テ酒家一酒をとりてのみたるなり。」（国立国会図書館蔵寛文元年刊本）と指摘されているように、陶淵明の故事と類似している。いま陶淵明の故事を『宋書』巻九十三の隠逸伝から抄出してみよう。[2]

性嗜レ酒、而家貧不レ能二恒得一。（中略）顔延之為二劉柳後軍功曹一、在二尋陽一、與レ潛情款。後為レ始安郡、経過、日々造レ潛、毎レ往必酣飲致レ醉。臨レ去、留二二萬銭一與レ潛、潛悉送二酒家一、稍就レ取レ酒。

陶淵明は酒を好んでいたけれども、家が貧しかったため自由に飲むことができなかった。顔延之は、尋陽にいた時、陶淵明と深い交友関係を結び、後に始安郡の太守になってからも尋陽に立ち寄った時には必ず陶淵明を訪ねて一緒に酒を飲んだ。そして顔延之は任地に赴く前に二万銭を陶淵明に残し、陶淵明はその全額を酒屋に持って行き、少しずつ酒を取り寄せたという。この話と先の盛親僧都の話とを比較すると、両者のモチーフはまったく同じと言えよう。貧しい生活をしていたところに思いがけず大金が入り、それを自分で所持せず、他人に預け、全額嗜好物に使ってしまう。金銭、財物を至上に置く世俗の価値観とは異なり、芋頭や酒を価値基準の最高位に据えた盛親僧都と陶淵明は、嗜好に対する愛着の深さと、金銭に対する無欲さにおいて一致していると言えるであろう。

盛親僧都と陶淵明との類似はこの箇所に止まらない。第六十段では、盛親僧都は病気の時、七日間、或いは十四日間、療治と言って僧房に籠り続け、上等な芋頭を選んで存分に食することによって、どんな病気も治したと書かれている。陶淵明もその詩に、

汎此忘憂物　此の忘憂の物に汎かべて、
遠我遺世情　我が世を遺るるの情を遠くす。
（「飲酒」二十首　其七）

中觴縱遥情　中觴遥かなる情を縱いままにし、
忘彼千載憂　彼の千載の憂いを忘れん。
（「游斜川」）

酒能祛百慮　酒は能く百の慮いを祛い、
菊解制頽齢　菊は解く頽るる齢いを制す。
（「九日閒居」）

と詠じており（中国詩人選集『陶淵明』、岩波書店、一九五八年）、「忘憂」の酒は、「千載の憂」、「百の慮」など彼の心を痛めるさまざまな悩みを癒したという。

『徒然草』第六十段のこの一節には、『宋書』隠逸伝に見ら

れる陶淵明の故事が強く影響していると言えよう。

二　阮籍伝との関わり

次に、第三節に記される盛親僧都の性格の描写と、『晋書』阮籍伝との類似性を検討したい。第三節は、次のように描写されている。

この僧都はAみめよく、力強く、大食にて、能書、学匠、弁舌人に勝れて、宗の法灯なれば、寺中にも重く思はれたりけれども、B世を軽く思ひたる癖者にて、Cよろづ自由にして、大方人に従ふといふことなし。D出仕して、饗膳などに就く時も、〔皆人の前〕据へわたすを待たず、我前に据へぬれば、やがてひとりうち食ひて、帰りたければ、ひとりつい立ちて出にけり。時、非時も、人と等しく定めて食はず。我食ひたき時、夜中にも暁にも食ひて、睡たければ、昼も掛け籠りて、いかなる大事あれども、人の言ふこと聞き入れず。目覚めぬれば、幾夜も寝ず、心澄ましてE嘯き歩きなど、F世の常ならぬさまなれども、人に厭はれず、よろづ許されけり。徳の至れりけるにこそ。

一方、『晋書』巻四十九の阮籍伝の冒頭部は次の通りである。

阮籍字嗣宗、陳留尉氏人也。父瑀、魏丞相掾、知名於世。a籍容貌瓌傑、志気宏放、b傲然独得、c任性不羈、而喜怒不形於色。d或閉戸視書、累月不出、或登臨山水、経日忘帰。博覧群籍、尤好老荘。嗜酒能嘯、善弾琴。当其得意、忽忘形骸。f時人多謂之癡。惟族兄文業毎歎服之、以為勝己、由是咸共称異。

阮籍は字を嗣宗といい、陳留尉氏の人である。父の瑀は魏の丞相・曹操の掾属であって、その名が世に知られている。阮籍は、容貌が優れ、気迫が大きく、世に傲り、わがままで他に拘束されず、また喜びや怒りの感情をあらわにすることもなかった。家に籠って読書に耽ると何ヶ月も外出せず、山水を歩き廻ると何日も帰ってこなかった。群書を博覧し、特に老荘を好んだ。酒を多く飲み、嘯きをよくし、琴も上手で、我が意にかなえば自身の肉体の存在さえ忘れた。当時の人々は皆彼を「癡」と言ったが、ただ一人従兄の文業だけは阮籍に歎服し、自分より勝る者だと思った。これによって人々も非凡だと認めるようになったという。

傍線部Aとa、Bとb、Cとc、Dとd、Eとe、Fとfがそれぞれに対応している。

傍線部Aとaは、ともに両者の容姿の素晴らしさを言い、傍線部Bとbは、ともに世間を軽視する性格であったことを述べている。傍線部Cとcは、いずれも他人に束縛されず、自由奔放であると記してある。傍線部Dとdは、具体的な行

動の描写である。盛親僧都は、仏事に呼ばれて御馳走の膳に向かう時も、一座の人に随従せず、戒律上の作法も守らずに、自分が食べたい時は、夜中でも夜明けでも食べる。また、眠くなると昼間でも、そしてどのような事件が起ころうとも部屋に閉じ籠って眠り、一旦目が覚めてしまうと、幾晩も寝ずに嘯いたりする。一方、阮籍は何ヶ月も部屋に閉じ籠って読書に熱中するかと思えば、また好んで山水を歩き廻って何日も帰ってこない。両者の行動内容の細部は異なるが、思うままに振舞って、自分の世界に没頭する点は共通である。また、傍線部Fとfは、両者の常識を超えた行動に対する周囲の評価が記されている。

以上の比較から、第三節における盛親僧都の描写は、『晋書』阮籍伝に似ていることが分かる。しかし、阮籍のような人物像は、『晋書』阮籍伝のみならず、漢籍及び日本の漢文の中にもしばしば現われることから、兼好が阮籍をイメージしていたか否かは以上の比較のみでは判然としない。そこで、次に、傍線部Eの「嘯き歩き」と傍線部eの「嘯」の言葉に焦点を絞って考えてみようと思う。

「嘯く」の意味について、『古語大辞典』(小学館)には、「①口をすぼめて、息を強く吐く。また、口をすぼめて、声を出す。口笛を吹く。②詩歌を吟詠する。口ずさむ。③動物などがほえる。鳥などが鳴く。④相手を無視する態度をとる。そしらぬ顔をする。」と説明されている。中古、中世の「嘯く」の用例を見てみると、②の意味に相当するものが多く、『徒然草』の注釈書でも、第六十段の「嘯き歩き」をほぼそのように解釈している。

・詩歌を吟じて歩き廻るという具合で。
(西尾実・安良岡康作『新訂徒然草』、岩波文庫、一九六七年)
・うそぶきながら歩くなどという具合で。「うそぶく」は詩歌を吟じたり、口笛をふくこと。「うそぶきありき」は、悠然としてのんびり歩くさまをいう。
(三木紀人『徒然草全訳注』、講談社学術文庫、一九八二年)
・詩歌などを口ずさんで歩き。
(久保田淳「徒然草評釈・百二十六」『国文学解釈と教材の研究』三五―三、一九八九年三月号)

なお、「嘯く」の語は、『徒然草』では第六十段の「嘯き歩き」一例しか見えない。一方、中国語の「嘯」は、『説文』に「嘯、吹声也」とあるように、口笛を吹くことを示す。魏晋時代には、神仙思想と養生思想が流行し、「嘯」は仙人のしぐさと言われ、名士の間で流行っていたが、阮籍は、その「嘯」の名手として伝えられている。『晋書』阮籍伝には、彼の次のようなエピソードが記されている。

籍嘗於二蘇門山一遇二孫登一、與商二略終古及栖神導気之術一、登皆不レ応、籍因長嘯而退。至二半嶺一、聞レ有三声若二鸞鳳之音一、響乎巖谷、乃登之嘯也。

阮籍は蘇門山で孫登に遇い、終古及び栖神導気の術につい

て話し合おうとしたが、孫登はいっさい返事をしなかった。阮籍は長嘯して退く。そして半嶺まで降りたところ、孫登の嘯きが聞こえ、それは鸞・鳳の鳴き声のようで、谷に響きわたったという。この話は『世説新語』棲逸篇にも載る有名な話である。また、この説話に登場する孫登については、その伝記が『晋書』隠逸伝に見え、山の洞窟に住んでいた隠逸者であることが分かる。注目したいのは、阮籍と孫登の「嘯」が俗語を超越した隠逸者の対話でもあったという点である。

日本にも、阮籍を「嘯」と関連させて詠んだ詩が多くある。例えば藤原宇合が、「忘レ筌陸機海、飛レ繳張衡林。清風入二阮嘯一、流水韵二嵇琴一」（『懐風藻』、九二「遊二吉野川一」・日本古典文学大系）と詠じている。また、『和漢朗詠集』（巻下、竹、四三一・日本古典文学大系）に収める章孝標の秀句「阮籍嘯場人歩レ月、子猷看処鳥栖レ煙」においても、阮籍と「嘯」が結び付けられている。鎌倉時代成立の『和漢朗詠集永済注』（『和漢朗詠集古注釈集成』第三巻、大学堂書店、一九八九年）は、この章孝標の句に対して、阮籍が孫登に会ったエピソードを引用して説明している。

此詩、上句ニ阮籍トハ人ノ名ナリ。晋ノ代ニ七人ノ賢人アリキ。心ヲ一ニシテ、アヒイサナヒテ、晋林トイフ竹ノ林ニスミテ、琴ヲシラヘ、詩ヲイヒ、酒ヲノミテ、心ヲヤリツ、世ヲスコシキ。此ヲ竹林ノ七賢トイフ。阮籍スナハチソノ一也。七賢トハ、嵇康字叔夜、阮籍字嗣宗、阮咸字仲容、向秀字子期、劉伶字伯倫、王戎字濬仲、山陶字巨源也。嘯場トハ、カレラカウソフキアリキシ竹ノ林也。阮籍ハ、ツネニウソフク事ヲナンシケル。孫登トイヒシ人ノ石室ノ内ニテ筝ヲシラヘシニ、阮籍ナカクウソフキタリシカ、曲ニカナヒテイミシカリケルナリ。烈仙伝ニミエタリ。人歩月トハ、竹ノ林ニ枝マノ月ノテラシタルニ、人ノアリクヲ歩月ト云也。

青木正児氏の論考[3]によると、「嘯」は、魏晋時代に神仙家や道家が養生的意義を持たせて用いた語であり、その後転じて、神仙家的高踏生活の意も加わったという。氏は、『源平盛衰記』から、「宮は五月の空の五月雨の雲間の月を詠つつ、御心を澄しうそぶいて、何の行末も思召知らぬ折節に」（巻十三、熊野新宮軍の事）、「住江殿の釣殿に御座て、つくづくと嘯て」（巻三六、維盛住吉詣の事）、『平家物語』（長門本）から「鳴見潟しほぢはるかに遠見して、常に浪月をのぞみ、浦ふく風にうそぶき、琵琶をたんじ詩を詠じ、なほざりにあかしくらし給ひけり」（巻七、太政大臣師長趣配所給事）などの用例を挙げ、日本では漢文の影響で中世以後、詩歌を口ずさむ意としてのみでなく、高踏的意味での無声の「嘯く」も用いられるようになったと述べる。

『源平盛衰記』には、「晋の七賢は竹林寺に嘯き」（巻三、右大将の事）とあり、また、先に引用した『和漢朗詠集永済注』などでも、阮籍は「嘯」と結び付けられていた。このような

用例から日本における「嘯く」という語の意味の変遷には、竹林の七賢、特に阮籍伝の逸話が強く影響したのではないかと考えるのである。そして第六十段の「嘯き歩き」も、阮籍の「嘯」を意識して書いたと思われる。つまり、この語は、阮籍と同様、俗世の雑念を払拭した盛親僧都の清澄な境地を表現していると思うのである。

以上、盛親僧都と阮籍について見てきた。実は両者の類似点は前述の箇所にとどまらない。第六十段には、盛親僧都は「大食」、「能書」、「学匠」と描かれているが、阮籍は『晋書』に「嗜酒」と記され、また、群書を博覧し、詩文ともに世に重視されていたと言われている。さらに、盛親僧都は「弁舌」と記されるが、阮籍は老荘哲学の弁論家として周知の人物でもあった。

三　「しろうるり」と「白癡」

次は第二節を考察する。この節は次のように書かれている。

　此僧都、ある法師を見て、「しろうるり」といふ名を付けたりけり。「とは何ものぞ」と人の問ひければ、「さるもの、我も知らず。若あらましかば、かの僧が顔に似てん」とぞ言ひける。

盛親僧都はある法師を見て、「しろうるり」という異名を付けた。「それはどんなものですか」と人が聞くと、「そういう物は私も知らない。もしあったならば、この僧の顔に似ているだろう」と言った。

「しろうるり」は、『徒然草』の難語として、近世にはさまざまな解釈が試みられたが、近代以降は、「しろうるり」に対して、特別な意味を付けない方向にあると言える。例えば、山田孝雄氏は、「色の白く瑠璃の如くつや〳〵したる顔は考へられたりと思へど一定の意ある語とは見えず、何となく口に任せていひしまでのことならむ、但し何となく僧の愚かしき姿の見ゆるやうに思はるゝふしあるは面白し」（『つれ〳〵草』、宝文館、一九四三年）、安良岡康作氏は、「「しろ」は、白であろうが、「うるり」は不明。盛親もわからずにあだ名しているのである。」（『徒然草全注釈』、角川書店、一九六七年）、久保田淳氏は、「もとより盛親がいい加減に言ったことであるから、ほとんど無意味な言葉というに近いはず」（『徒然草評釈・百二十六』）と解釈している。また、重松紀彦氏は、「象徴するものが何であるかにこだわる必要はなく、このエピソードで盛親僧都の態度の飄逸さが感じられたら、兼好としては目的が達せられたとみて差支えない」と述べる。[4]

重松氏の指摘したように、この第二節の目的は、盛親僧都の態度の飄逸さを表現することにあると言ってよいだろう。しかし、「しろうるり」の意味を理解しなければ、兼好の描いた盛親僧都の飄逸さを十分に読み取ることはできないと思わ

れる。そこで、以下に、「しろうるり」という言葉の意味を再検討し、その機能を考えたい。

まず、伴信友の『比古婆衣』（『伴信友全集』第四・国書刊行会、一九〇七年）巻四の一節に着目したい。

いはゆる白うるりとは、かの法師の愚に癡たるを誹謗れるにて其は漢語に不慧なるものを白癡ともいふを白うるりといひなせりときこえたり、さて其うるりといへるは神代紀に癡騃を干樓該（ウルケ）と訓る〈字書に癡を不慧也、また神思不足也など注し、騃は癡也と注せり〉と同言の転れるなり〈俗言におろかなるもの、状をうろりうろ〳〵、うろつくなどいひ、又うろたゆなどもいへり〉和名抄に細魚宇留里古とみえたる魚は一寸許なる小魚にてあまた群り浮連りて川の汀に沿ひて遡るものなるが、いとおろかげにて人に怕れ驚くことなきを童子などのたやすく漉捕てもてあそびにもするものなり、其が名をうるりこといへるも癡（ウルク）たるよしの名なるべきはたおもひ合すべし〈若狭にてはうろりこともいへり〉さてかの法師を盛親が然名付たりけるをその意を得ざる人の白うるりとは何なる物ぞと問へるを、やがて其人をも併せ誹謗て然る物を我もしらずもしあらましかば云云とさればみたるまさな言とぞきこえたる、（下略）

伴信友の説によると、「しろうるり」は「白癡」という漢語表現から連想されたものであり、「ウルリ」についても「癡」の上代の訓「ウルケ」から転訛したものであるという。

今再び『晋書』の阮籍伝の表現に注目して、伴信友のこの説を検討してみる。

先ほどに引用した『晋書』阮籍伝に、「時人多謂二之癡一」とある。当時の世俗の人たちは阮籍を理解できず、「癡」と評価したのである。ただし、愚鈍な人を「癡」というのは阮籍伝に特有の表現ではない。例えば、

王藍田為レ人晩成、時人乃謂二之癡一。

（『世説新語』賞誉篇・新釈漢文大系）

襄陽羅友有二大韻一。少時多謂二之癡一。

（『世説新語』任誕篇）

は、そのような用例である。

また、「癡」は「白癡」とも言う。『蒙求』の故事を見てみよう。

周子有レ兄。而不慧不レ辨二菽麦一。故不レ可レ立。杜預曰、菽大豆。豆麦殊レ形易レ別。故以為二癡者之候一。不慧蓋世所謂白癡。

（『蒙求』三九二「周兄無慧」・新釈漢文大系）

「不慧（智恵が足りない）」とは、今の世でいう「白癡」のことであると記されている。

日本では、「癡」のもっとも古い用例は伴信友の指摘した如く『日本書紀』神代下に見える。

因奉レ教之曰、以レ此與二汝兄一時、乃可稱曰、大鉤、踉蹌鉤、貧鉤、癡騃鉤。言訖、則可二以後手投賜一。（中略）踉

蹉鉤、此云二須須能美膩一。癡騃鉤、此云二于楼該膩一。

（日本古典文学大系）

『日本書紀』の「癡騃鉤」には「于楼該膩」と訓が付されている。「癡騃鉤」について、『時代別国語大辞典上代編』では「ウルケは動詞の連用形であろう。オロクと同じ語であるとすれば、鈍って役に立たない釣針の意となる。」と説明している。『類聚名義抄』（観智院本）によると、「癡」は、「カタクナ、オロカナリ、カタクナシ」（法下・六十五オ）の意、「騃」は「オロカ、カタクナ」（僧中・五十一オ）の意である。「癡騃鉤」の「癡」と「騃」は同義である。

兼好が神祇官に奉仕した卜部氏の出自であったことは既に多くの指摘がある。大隅和雄氏の言葉[5]を借りれば、卜部氏は「神道の故実を伝え、禁忌をきびしく守って、神祇信仰の伝統を伝えることにつとめ、そのことに大きな誇りを持っていた」一族で、「平野流に出た兼方は、兼好が生まれた頃に、『釈日本紀』という最初の本格的な『日本書紀』の註釈書をあらわし」ている。そのような家系に育った兼好は『日本書紀』の教養を十分持っていたはずである。また、兼好の漢籍知識の豊かさからも、阮籍伝の「時人多謂二之癡一」の「癡」から「白癡」を連想し、さらに「白癡」を「しろうるり」と訓読するのは難しいことではなかったと思われる。このような兼好独自の漢語訓読は『徒然草』の他の章段にも見られる。[6]

智者が相手に異名をつけることなどによって、自分の機知を示し、相手の愚かさをからかうというような説話の話型は竹林の七賢関連の説話にも見られる。『世説新語』簡傲篇にある呂安の故事を見てみよう。

嵇康與二呂安一善。毎二一相思一、千里命レ駕。安後来、値康不レ在。喜出レ戸延レ之、不レ入、題二門上一作二鳳字一而去。喜不レ覚、猶以為レ欣。故作二鳳字一、凡鳥也。

嵇康と呂安とは仲が良く、一たび会いたいと思えば、千里を隔てていたとしてもお互いを訪ねた。ある時呂安は嵇康を訪ねたが、嵇康は不在で、兄の嵇喜が門口へ出て請じ入れようとしたが、呂安は入ろうとはせず、門の上に「鳳」の字を記して立ち去った。鳳は立派な鳥の名であるが、文字を分解すると「凡鳥」となり、呂安は嵇喜が世俗的、平凡な人であるのを軽蔑してからかったのである。しかし、嵇喜はその意味を悟らず、喜んだという。この説話は『蒙求』にも、「呂安題鳳」の標題で掲載され、非常に有名である。

ちなみに、嵇喜は阮籍にも嫌われている。阮籍が、嵇喜の来訪に対しては嫌悪を示す白眼で迎え、嵇康に対しては、親しみを示す青眼で迎えたという逸話が、『晋書』阮籍伝や『世説新語』簡傲篇などに伝えられている。

伴信友の考証は、論拠が不十分なため、深く検討されてこなかったが、『日本書紀』と『和名抄』に加えて、阮籍伝との関わりを踏まえて考えれば、「しろうるり」という言葉には、「白癡」がイメージされていたと言ってもよいのではないだ

ろうか。

第六十段では、盛親僧都は「やごとなき智者」と記される。智者としての盛親僧都はある法師に「しろうるり」という異名を付けた。ある法師はいうまでもなく愚者であろう。そのあまりの愚かさを、盛親僧都は異名をつけてからかったのである。その真意は、普通の人にはもちろん分かる筈がない。兼好はこの節を書くことによって、盛親僧都の機知と、その超然とした生き方を描こうとしたのだと思われる。「しろうるり」は兼好の意図的な虚構である可能性が大きい。兼好は中国の隠逸者の説話からこのようなユーモアの発想も学んだのであろう。

四　盛親僧都の実像について

最後に盛親僧都の実像について考察する。

盛親僧都については、伝記が伝わっていないことと、性格が奇抜であることによって、兼好によってのみ書き伝えられた人物ではないかと見なされることがあった。[7] しかし、中新敬氏が「後宇多院御灌頂記」に盛親の名前を発見し、[8] また近年、五味文彦氏も、正応五年の真言院後七日御修法の記録に盛親の名前が見えることを指摘している。[9] このように東寺関係の史料に盛親の名前が確認されることによって、その実在が明らかになった。

今、この二つの史料を検討すると、まず正応五年（一二九二）の後七日御修法を記載した「正応五年後七日御修法修僧等夾名事」（『大日本古文書』「東寺文書」）には、盛親は「権律師」の身分で登場する。

阿闍梨僧正法印大和尚位禅助　金剛界
隆証法印権大僧正（増益護摩）　弘舜権大僧都（息災護摩）　房舜権大僧都　隆雅権少僧都　実縁権少僧都（五大尊供）　宗済権少僧都（聖天供）　禅恵権律師　厳深権律師（十二天供）　盛親権律師　親忠権律師（諸神供）（下略）

兼好が通説どおり弘安六年（一二八三）の生まれだとすると、この年、兼好は九歳である。つまり、盛親は兼好と同時代の人で、しかも兼好より年長であったということが分かる。

一方、「後宇多院御灌頂記」（『群書類従』第二十四輯）は、徳治三年（一三〇八）一月二十六日に、東寺で行われた後宇多院伝法灌頂の儀式を記載した史料である。

次持花衆卅二口。（持花宮）
権大僧都承信。亮禅。権少僧都長親。盛親。長禅。深増。成誉。行耀。厳昌。経乗。寛昭。寛誉。経然。頼済。尊誉。房守。覚親。道我。法眼顕恵。権律師憲什。俊暁。禅重。裔親。禅清（下略）
次持金剛衆廿六口。
法印権大僧都定厳。弘舜。実縁。禅雄（下略）

この儀式では、盛親は「持花衆卅二口」の一人として出仕しており、身分は「権少僧都」であった。

『徒然草』第六十段は、「真乗院に盛親僧都とて、やごとなき智者有けり」、「芋頭といふものを好みて多く食ひけり」、「人に厭はれず、よろづ許されけり」などと、間接経験を示す助動詞「けり」によって文が結ばれており、盛親僧都についての情報は、他者によってもたらされたものであったと見なされる。[10] 正確な情報源は、未詳と言う他ないが、例えば、中新敬氏は、先掲の「御宇多院御灌頂記」に道我の名前が見えることから、兼好は盛親の逸話を、道我から聞いたのではないかと推察された。[11]

また、第六十段には、盛親僧都は真乗院の僧都であると記されていることから、仁和寺に情報源があった可能性も考えられる。そこで、『徒然草』第二百三十八段が兼好と真乗院との関係を考える重要な章段として注目されてくるのである。[12]

一、顕助僧正伴ひて、加持香水を見侍しに、いまだ果てぬほどに僧正帰り出で侍しに、陳の戸まで僧都見えず。法師どもを返して求めさするに、「同じさまなる大衆多くて、え求め会はず」と云て、いと久しくて出たりしを、「あなわびし、それ求めておはせよ」と言はれしに、帰り入て、やがて具して出でぬ。

ここに登場する「顕助」僧正は、鳥丸本では「賢助」僧正となっており、従来、「顕助」と「賢助」の両説があった。[13] 正徹本の「顕助」に従えば、この人物は仁和寺真乗院の顕助僧正となる。『仁和寺諸院家記』（『群書類従』第四輯）によると、顕助は越後守平貞顕の子息で、禅助[14]を付法として真乗院に入室、正中二年（一三二五）には東寺長者となり、元徳二年（一三三〇）三十七歳で亡くなっている。兼好は顕助と交友関係をもっていたことから、盛親についての情報源が顕助であった可能性も考えられる。

兼好が『徒然草』を執筆した時期には盛親は既に晩年であるか、或いはもう他界していたかもしれない。兼好は他から得た盛親の奇行を『徒然草』の一段としてまとめたと考えられる。

おわりに

第六十段からは、盛親は優れた知性の持ち主で、ひたすら仏道修行に励んでいる一方、傲慢、わがままで、世俗の名聞栄達とは程遠い僧侶であったと想定される。しかし、本稿で考察してきたように、盛親僧都の人物像には、陶淵明、阮籍などの影響が強く見られる。このことは、盛親僧都の人物造形に、兼好の潤色と創造が施されたことを示している。

陶淵明と阮籍は、乱世に生き、身の安全と精神の自由を守るために、政治から身を引いた所謂隠逸者と呼ばれる人物であった。兼好は『徒然草』第百七十段で阮籍の故事、第百七

十五段で陶淵明の詩に触れている。また、その他にも、阮籍と同じく「竹林の七賢」のメンバーである嵇康の文章を第二十一段、第二十八段、第百二十九段の三段に引用している。第六十段の盛親僧都の人物描写には、陶淵明伝、阮籍伝などの影響が見られた。兼好は、陶淵明、阮籍などの逸話から、中国の隠逸者たちに共通する俗世の形式にとらわれない理想的な生き方を見出して、盛親僧都という人物造形に反映させたのだと思うのである。

注

(1)例えば、次田香澄氏は、「盛親僧都の人間像を描き出すことを目的として、全段に種々具体的に特徴・事例をあげつつ立体的に生き生きと造型している」と指摘している(「兼好の人間観」『徒然草講座』第一巻、有精堂、一九七四年)。また、冨倉徳次郎氏も、盛親僧都は「兼好が見出した人間の理想的な姿の一つだ」と指摘している(『類纂評釈徒然草』、開文社、一九五七年)。

(2)陶淵明の伝記は、『宋書』隠逸伝、昭明太子蕭統の「陶淵明伝」、『晋書』隠逸伝、『南史』隠逸伝などに掲載されている。陶淵明と顔延之とのこの逸話は、『宋書』と蕭統の「陶淵明伝」に見える。

(3)青木正児「嘯の歴史と字義の変遷」(『青木正児全集』第八巻、春秋社、一九七一年)

(4)重松紀彦「「しろうるりの」言語理論的考察」(愛媛国語国文学会『国文研究』第四号、一九五五年)

(5)大隅和雄「兼好と神道」(『徒然草講座』第一巻、有精堂、一九七四年)

(6)例えば、第八十五段に、「至りて愚かなる人は、たま〳〵賢なる人を見て、これを憎む」とあるが、「至りて愚かなる人」は兼好が漢語の「至愚人」をそのまま訓読したものであることを安良岡康作氏が指摘している(『徒然草全注釈』)。

(7)例えば、冨倉徳次郎氏は、「この真乗院の盛親僧都については、他に伝えたものがないが、こうした人間像は恐らくは文芸人兼好によってのみ描き伝えられるものでなくてはならないと思われる。」と述べている(冨倉徳次郎(注1)前掲書)。

(8)中新敬『徒然草の成立に関する研究』(私家版、一九五九年)

(9)五味文彦『「徒然草」の歴史学』「第三部 異郷と遁世 4遁世の周辺―仁和寺の僧たち」(朝日新聞社、一九九七年)

(10)『徒然草』における「けり」と「き」の使用は、特別な場合を除いて、「直接体験」と「間接体験」の別を示している。細谷直樹『方丈記・徒然草論』(笠間書院、一九九四年)、堀田要治「徒然草の解釈文法」(『国文学解釈と鑑賞』、一九八三年一月臨時増刊号)参照。

(11)中新敬(注8)前掲書。なお、道我は『徒然草』第百六十段に名が見え、また兼好との贈答歌がある人物で、二人に交友関係があったことは明らかである。『兼好法師集』(『新編国歌大観』)には道我との贈答歌が四首ある。

あづまへまかり侍りしに、清閑寺にたちよりて、道我僧都に
あひて秋はかへりまでくべきよし申し侍　そうづ
かぎりしるいのちなりせばめぐりあはん秋ともせめてちぎりおかまし　(六九)

返し
行すゑのいのちをしらぬわかれこそ秋ともちぎるたのみなりけれ　(七〇)

後宇多院よりよめる歌どもめされ侍りけるに、たてまつるとて僧正道我に申しつかはし侍りける

人しれずくちはてぬべきことのはのあまつそらまで風にちるらむ　（一〇三）

返し　そう正

ことわりやあまつそらよりふく風ぞもりのこのはをまづさそひける　（一〇四）

(12)『徒然草』第二百八段には、弘舜という人物が出てくるが、弘舜の名は先掲の「御宇多院御灌頂記」に見える。武石彰夫氏は、兼好と弘舜との関わりについて、「二百九段の記載は直接の見聞ではない。とすれば、そこに、顕助、道我を通しての伝聞であったとすることも考えられてよいと思われる。」と述べている（『徒然草の仏教圏』「第四章　兼好と東密圏」、桜楓社、一九七一年）。盛親僧都についての情報源を考える際には、氏の論文を参照した。

(13)最初に「顕助」説を打ち出したのは林栄瑞氏である（「兼好の母、兼雄の母（二）―兼好の家族的生活圏とその背景―」、『文学』、一九五九年一月）。小林智昭氏は、「正徹本記載の顕助をとり、兼好の生活圏における関東の重大さと、顕助との自然な結びつきを説かれる林瑞栄氏の論考はきわめて大きな説得力を持つ。しかし顕助との自然な結合関係にあることが、そのまま賢助説を否定しさることになり得るかどうか、問題はまだ残されているようであ」ると指摘している（「家持香水をめぐる覚え書き」『中世文学の思想』、至文堂、一九六四年）。また、五味文彦氏は、「伝来の旧い正徹本や常縁本が顕助としていることや、他の話にも金沢氏の関係の話が多く見えることから顕助と考えるべきであろう」（注（9）前掲書）と述べており、決着はついていない。

(14)顕助の付法の禅助は、先掲の正応五年後七日御修法と御宇多院伝法灌頂の儀式の大阿闍梨を勤めた人である。

※『徒然草』本文の引用は、新日本古典文学大系『方丈記　徒然草』（岩波書店）によった。陶淵明伝と阮籍伝の引用は、中華書局『宋書』、『晋書』によった。

（しゃ・りつぐん　本学大学院博士後期課程）